校長室だより～燦燦～ №６２

国際理解教育

2020.2.17

教員の世界に「福島県国際理解教育研究会」という組織がある。この会は、簡単にいうと海外にある日本人学校や補習校に派遣された先生方の会である。毎年１回、福島市、郡山市、会津若松市、いわき市を持ち回りで会場とし、午後半日をかけて総会、帰国報告会、壮行会、懇親会を行っている。

帰国報告会では、派遣先から日本に戻ってきた先生方が、派遣先での実践や生活について報告する。壮行会は、これから派遣される先生方を激励する会である。そして、懇親会は派遣される先生方を含め、参加者全員の交流の場となる。懇親会には家族で参加される方もいる。

今年度で２４回を数えるこの会は、２月８日（土）にいわき市で開催された。私は、平成１１年度にイタリア、ローマ日本人学校に派遣となり家族とともに３年間を海外で過ごした。平成１４年度に帰国し、その年の会で帰国報告を行った。あとは福島市で開催されたときに一度参加しただけである。このときは、当日会場に行ってから「高澤先生、懇親会の司会をお願いします」といきなりいわれ「めったに参加しない私のような者がいいのだろうか」とは思ったが、とりあえず無難に役目を果たしたことを覚えている。

毎年案内が届く度に行こう、行こうとは思っていた。だが、結局行かずにいた。事務局の先生方には申し訳ない思いだった。すると、数年前に、この会で「基調発表をしてくれないか」という話が舞い込んだ。この会は県の組織だが、全国組織として「全国・海外子女教育・国際理解教育・研究協議会（全海研）」というものがある。この会は全海研の地方組織にあたる。このときは、全海研の東北ブロック大会を兼ねることになっていた。規模も１日開催で基調発表あり、実践発表ありとなっていた。

私は「今まで２回しか出たことがない私でいいのか。何の実践もしていないぞ」とは思ったが、依頼内容は「モンゴルに行った教師海外研修のことを発表してほしい」とのことだった。私は「ここでモンゴルがきたか」と思ったものの、「ローマとモンゴルの経験をまとめることで、何かが見えてくるかもしれない」という思いで引き受けることにした。モンゴルに行くことにした際も「自分はローマには行ったが、帰国してから何もしていない」という思いにかられたことを覚えている。

東北ブロック大会基調発表というプレッシャーを少なからず感じつつ、改めてモンゴルでの研修のことや授業実践のことを振り返り、パワーポイントでデータを作成していると、大変有意義な時間となった記憶がある。当日の発表では、時間がおしている中、何とか簡潔にまとめることができた。期待に応えられたどうかはわからないが、どうにか役目を果たすことができた。終わってみると、年に１回この会に出て刺激をもらうのもいいなと考えるようになった。帰国報告会では、様々な国々の状況や日本人学校、補習校の様子を知ることができる。懇親会では、県内各地の先生方と交流することができる。自分の視野が広がり、知り合いの先生方も増えていく。

このときの東北ブロック大会では何人もの先生方が発表したが、中国の日本人学校から帰国し、報告してくれた若い女性教員がいた。この先生の発表がすばらしく、「いったい何者だ」と思わせるほどだった。時間がおしている中、ポイントを押さえながらわかりやすく発表していく。事前に練習しているとは思えなかったが、ごく自然に見事な発表をしていくのである。「この人はすごい」と思い、早速お話を伺ったところ、中国の派遣先で日本の銀行マンと知り合い、今度ご結婚し、山口県に行くというではないか。優秀な人材の県外流失である。残念である。